

2016年1月3日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 11章 29～32節

説教 「ヨナのしるし」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

主イエスの噂を聞き、主イエスの力ある業を見たいと思う人々が、いよいよたくさん集まってきていました。彼らの中には、主イエスが悪霊を追放される力ある業を見て、それが本当に神からの力によるものかどうか、「天からのしるしを見せてほしい」と考えた人たちもいたようです。そんな人々に、主イエスはきっぱりと語られます。

「今の時代の者たちはよこしまだ」（29節）。そして続けて、「しるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」と言われます。「しるしは与えられない」というのが主文ですが、そこに「ヨナのしるしのほかには」という言葉がついています。これはいったいどういうことでしょうか。

しるしというのはギリシア語でセーメイオンという単語で、新約聖書に70回以上使われています。ルカによる福音書では、クリスマス物語の中で天使の羊飼いたちへの知らせの中で最初に使われています。「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」（2：12）。ですから、良い意味で、すなわち人々を信じることができるようになるように励ましたり、助ける役割を担うものとして用いられている個所も少なくありません。ところが、ここで主イエスが拒否しておられるしるしは、悪い意味です。どうして悪いのかというと、主イエスがここにおられ、主イエスが御言葉を語り、力ある御業をしておられるのに、それを受け入れないで、それとは別の自分たち好みの「天からのしるし」を要求するからです。

考えて見れば、主イエスは地上で神の子の働きを始められるとき、荒野で悪魔の誘惑に遭われました。あのとき主イエスを誘惑した悪魔の言葉には、そのような天からのしるしを求める人間の思いを見ることができないのではないのでしょうか。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」、「神の子ならここから飛び降りたらどうだ」、「国々の権力と繁栄を与えよう」。これらの要求は主イエスに自分たち好みの神の子像を当てはめようとするものでした。さすが神さまだ、と感ずることができるよう誰にでも分かるしるしを見せてほしい、見せてくれたら信じてやろう、従っていこうという思いです。

けれども、主イエスはきっぱりと私たち人間の求める天からのしるしを与えることを拒否されます。神の子イエスは、いかにも神の子らしく振る舞われるお方ではないからです。ベツレヘムの飼葉桶に来られた時からゴルゴタの十字架につかれるまで、主のご生涯の歩みと死は、私たちの思いを高く超え、人間の期待と予想にことごとく反するものでした。

では、主イエスが「ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」と言われたときの「ヨナのしるし」とは何なのでしょう。ヨナ書は旧約聖書の中でも異彩を放つ物語です。全部で4章の短い話ですが、ひたすら神を避けて逃亡する預言者ヨナ(1章)、大魚に飲込まれるヨナ(2章)、ニネベの都を眺めながら、とうごまの木の下でふてくされるヨナ(4章)などどの場面も興味深く、多くのことを教えられます。しかしここで主イエスがお語りになっているのは、ヨナがニネベの都で宣教し、都の人々が悔い改めたというところです(3章)。

ヨナが異教徒の都ニネベを歩き回り、いささかぶっきらぼうに神の審きのメッセージを告げたとき、ニネベの人々は「おまえの言葉が本当に神の言葉である証拠を見せろ」とか、「奇跡を起こしてわれわれを納得させたら信じてやる」とは言いませんでした。ニネベの人々は彼の語る言葉に心刺され、王様から何と家畜に至るまで皆、断食して悔い改めたというのです。ヨナがニネベの人々のしるしとなったとは、こうしたヨナの存在と働きが、神の審きと憐みを示すものとなったということです。それと同じように人の子、すなわち主イエス御自身が今の時代の者たちにしるしとなると言われるのです。この私(イエス)の中に神の審きと憐みを見いださなければ、他のどこにもしるしを見つけることはできないと言われるのです。

ヨナに続いてソロモン王のエピソードも引用されます。話の焦点はソロモンの名声を聞いて遠路はるばるやってきた南の国の女王、シェバの女王のことです。彼女はソロモンの語る知恵の言葉に驚き、平伏したのです。ヨナの話もシェバの女王の話も、有名な昔話ですが、どちらもユダヤ人にとっては自分たちの優秀さを誇らしく思い起こすことのできる逸話であったに違いありません。

しかし、主イエスは言われます。「ここに、ソロモンにまさるものがある」、「ここに、ヨナにまさるものがある」。昔これらの異邦人が神の言葉と知恵の前にひざまずいたのに、主イエスがヨナにまさる説教を語り、ソロモンにまさる知恵を示している今、それに素直に聴かず、悔い改めず、その言葉を受け入れようとしないとなれば、ニネベの人々や南の国の女王という異邦人たちの方がよほどましではないのか、と言われるのです。

主イエスは、自分好みの天からのしるしを求めるのではなく、私の言葉を神の言葉として聞き、それをしっかりと受けとめ信じる人になりなさいと言われます。するとこれは前段落に書かれていた短い出来事と密接な関連があることが分かります。母マリアをうらやましく思って声をあげた婦人に主イエスが言われました。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人こそ幸いである」(ルカ 11:28)。今日の箇所はしるしを求める人々に対する厳しい警告の言葉ですが、それは裏返せば、私たちに対する「神の言葉を聞き、それを守る人こそ幸いである」という祝福と招きの言葉なのです。